



卯20遊11奇19話13  
 三

13  
 1457  
 3





13  
1437  
3  
卷

外遊奇談卷之二

高堂

隱形奇術死囚

西濃本業郡吉原の林屋の農家の子あり生れ敏捷  
あつて又其のはる能く理と解と長ずるにほひ書及  
文方も人な難んでけこ親方らの修験のうぐすま  
ねり相髪と名と也然るの山也後十入る其の法  
さるるにせり其先の中にもせびらるるに其人の  
相と見ると曰子凡人あり其の奇術と教へん  
依りて事於道如名をよむるもことと也



外遊奇談

三〇一







うく水鏡の足と冷んぬるのすもとかもてあの中に入  
 村吏たよいまゆそていも公使權と姑くいふ程もあ  
 き我先ゆく立かろ水鏡の中にえあお擲と印  
 りけバ水鏡のまを命一むくよゆくもきく後にも中  
 ぬりてど中ぬとるき男水鏡が徳とてあて前よ  
 引ま二筆一もとるの大乃男の力よまうせてあて  
 水鏡の眼くくもあまらあ物云のあていづらうう遊く  
 めくく立上らういづゆと我術あてけ返りてそと  
 んと合驗しそ新念とまばうぎや今まで圓圓の河あ

のうくく浦事ゆ石物ひ屋あるも村吏たよと路あ  
 のうくくあなよとるふもあてまうくゆくああ  
 名の大橋も梳うぐ板うそと強たぐんくまら村中志  
 づふゆあてそと強たぐんくまら村中志  
 一統よ水鏡がまふもとつれ氣軍此の尻理也と解せは大人  
 とらうめまう今まう流る初年形くも免に罪とあうて  
 は罪成済ひまてまもまうては此のむ水鏡とひいて大  
 ぼあひのやまうりぬ我ふあゆゆりぬもあ擲の恥辱とす





作  
松  
琴  
行

三  
三



かんぐあかひく人とあまうーヤろとあまうー村むとあまうーんや  
ひー秋の津流八坂の堤の御料すのと御進寄り御もあま  
いごんくは我洲のめと刀せまうーせんを砂と鯛で水魚を投と  
まぶしーとや水流カマの減ー大橋すーと通りー百姓を大橋へ  
里音の系があまうーはひ村膠有膏の力とつーてりてなりーろ  
也徳とと得て徳金とつーり徳有て日と送る寺院或は大  
高のあまうーせんてい例と行ふ刀ろの徳る徳とごふか那  
そよろ人の吹嘘とあまうーく徳候のまろも徳ろく出入とろ  
徳るはあまうーれ無ふ徳或は徳あまうーもと生とつーて

彦中と大あまうーの松橋あまうーの徳持とあまうーとあまうー  
の風系とろつーたが廣たまあまうーの太親あまうーのやほ  
中徳物とて刀ろあまうーの身たあまうーとあまうーの徳る  
人らあまうーとあまうーのろくく物とあまうーく婦女のあまうーひと  
かろて也徳とあまうーとあまうーの事官厨あまうーとあま  
てかろあまうー徳とあまうーのあまうーの事とはあまうーんもろ  
くーやろくあまうー下徳平にあまうーのあまうーも平あまうー徳あま  
おとろかろあまうーもあまうーま中かろあまうーのあまうーもあまうーとあま  
乱踏とあまうーのやせんつーあまうー也徳とあまうーあまうーの徳中あま

外在書天

三ノ田



トさるるりつて二三月を宰せしが建久之年月  
 十八日とて移るべしと由井が濱引物とて  
 前後と権とまゝ鎌倉南下は若きも公人として肩標符  
 捨てたるは夜中の也然るに其て是草井よふ者あり  
 其のよひつて鶏さくら我大にたつめくも  
 御事を記さんともうがらうも今日ふら  
 も是之令あて逃るるなり豈にぞと娘んや  
 まも心人二つに托わり若きもはと娘んで  
 立ちあがり今修治よ二とめりて生世は思

コすりて致めりて死の心ありて中々  
 吏法にて米を大に運りて死刑とあり我軍  
 女事かじまといひのめりて一とあり  
 て死と使くつて一とあり一とあり  
 也然るのふも也然るふも一とあり  
 法も情とありて今死とあり  
 其の悔くはは是後とあり今死とあり  
 志づく結末とあり一とあり  
 御とかりて是親とあり一とあり











村あて法人より各我輩に致さん物とて夫取てつひに  
一切を放てあやまらば地の相後と村抜らうまきうに地  
鳴意知て本木の例らうとて地よふの地り力とあ  
際と二カう引人して是とらん不腹経うとて胡盧の  
定めぞ合せり物らん後とらうらひ申けげ人の夜意あ  
あや申とよとてとと出だんらうり息あふ葉とあ  
んと溪水とらんて教面の四とげらう一あ奴僕之新荒奈  
あはれ口と申ひて葉との之艾と出て矣すもたよとて  
あこあうと道へ今人冷方らう涙と拂うてあふらう村裏に  
三〇

て大勢と引色 註被取らう村敷とあ地とて法余  
刃名しむま一統唱奉てと法勇と感のら壯たれ村周  
よあはれ実言の要なりとぞ狂ひるるふあまぬ僕と義  
一まこ地と埋んで堀とつき今ふらうの地堀と鳴意と法  
希代の民勇と感と次又或日新荒人痛と逢申は  
日とらじああつらにあど源とよふととあまらえより里  
徑と一月とまきと山と赤体とひてあまらうらんと石と  
らうららあけたととあやまらうらと金とも真とておの  
あやかりと本とらひとあつらとあらとらとあけはとあ  
三〇







ばりりたる捕陣の中ら夫たづみ近し力全まばるるん  
 上ふ人の煙を撃つてそりて煙幕は若婦人の泣き  
 とて齒と海をうりて必死なる窟窟とてたぐん方ほ  
 物きたる飛ぶあてを命をいせりうづらに燈をきて茶  
 へ委と新花が雷丸は煙とらんよりちち笑あては月れで  
 く捕陣志とて整く年とてまてばとてそとてよりし  
 鳴地うりてそり火を消さるり新花若たけあり  
 火繩とついでそとてんきも相りちよあ中とてあう  
 松の爪とついでそとてんきも相りちよあ中とてあう

籍くして雲角は血とくぐ事夥ちよきたる魂  
 刃と新花大しほ怖とて我を口とて傲破せし相たうん  
 為血とてうくして巢穴とてうぐいと雲とてまは月も  
 中の中ゆりながらこまふあてをゆりたるも夜あまも同  
 那鳴海村とていふ知ぬよあるあは右系とてうづらあり福  
 富新花が海軍あてて汎汚濁とてうづら新花ハ  
 の言を教生と好くた系ハ生得とて好まざるもたぐ山  
 中ふゆりて煙幕の情とあはし妻ハ赤緑の團乃共  
 たらうし初り女よるをひらううそは生樂法とてた系は



擡舉して妻と形して家奉とゆゑ云々一子と生れと  
小男子なまを珠乃とて寵愛しける或疾大系如小  
物く海文は家不かつに園中稚子の啼て妻をよんと  
枕の小書一巻一封の書あり夫と取引くをよると不  
羽中此書は小後孫の終あり右系大系の中へ書け  
を妻の書とてねの志とめぐる我なり人ならん合も  
る物よありて志と不君の足牙福西氏智聖とねみどは  
物の命と書と我部下と進る不命とねの足牙と  
中世んで我小書進といふも人なきやうかくい人乃

極書部平ら小方便り君と中不世ひるを流漢と何不  
生るとんくはあつと不あつとおあつと君つくと福  
氏とくくくめんつとあ不あつと流しては家不まらに思ひ  
園中此書は終あり海と情のいほぬりはとわと書井の  
とめらるる月日種く子までかりとつとくは福也縁  
る此書は終ありと神と進るとん不ふと進とつとくは  
海くく入権飾とつと人あつと甲斐とつとくは福也  
氏は海文とまらとつと書同しとくは思はるる不今世と  
中めく彼人のあ不書と進とつとくはとつとつと因果



乃る理のざかりし素のく先の我のわが彼  
人の母の境とありてはつるを被離我の國の成長の故  
我子とてめんを恨る事なれやはるりほくあるべし  
君ふらふぬ是遇とありしを稚子に記されかきとあり  
そ我不善此のくはるはれんとくまらふふらふ  
されはれらうぬこの理のまことありしはるり  
あはれとくはるはれとありしはるり  
て顔顔とかりた系たはれしはるり  
かたあとしはるりいふるすはるり

かんぞこまはれ人くはるり  
と持して雲の流るり  
よりあはれはるり  
てあはれはるり  
け遇ひはるり  
かたあとしはるり  
新花はるり  
とくはるり  
わがてはるり



まこと新義と恒をまに海をく言うらるる系が子成  
長そとあま事とつめと一字紙建をて海珠寺とつふ  
年々今日信と清と母乃善提とつむらふは後者の  
うと女性の内々恒のうら恒すすらめんる共あまた  
かげのうらあふかげに後まに憾はと憾とてうらと  
ふららるるうらとて事恒ふららとてとも尾陽の隠士  
小池氏のあふ恒記と珠苑すらとつむらに開てうら小記と

外遊奇蹟考之三終





